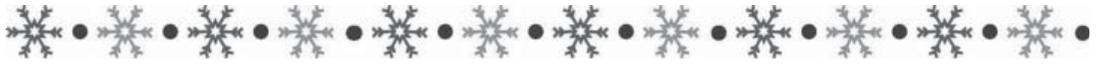


ボランティア通信 ～小学校AT～



目次

| |
|--|
| <p>大口台小学校 「1年間のボランティア活動から学んだこと」 人間科学科 3年 小箱駿太</p> |
| <p>神橋小学校 「大切な2年間」 人間科学科 4年 内田朱音</p> |
| <p>「気付きに気付く力」 英語英文学科 2年 末廣帆乃佳</p> |
| <p>「英語と調べ学習」 英語英文学科 2年 山下 晴菜</p> |
| <p>神大寺小学校 「児童の成長を促す指導」 法律学科 3年 神田祥佳</p> |
| <p>白幡小学校 「『先生』と呼ばれること」 経済学科 4年 萩原慎</p> |
| <p>「『AT』から『先生』へ」 英語英文学科 4年 阿部良美</p> |
| <p>二谷小学校 「体験学習で学んだこと」 自治行政学科 4年 横山裕也</p> |
| <p>「メリハリのある先生を目指して」 経済学科 3年 佐藤康平</p> |
| <p>南神大寺小学校 「私ができること」 人間科学科 4年 橋本菜</p> |

1年間のボランティア活動から学んだこと

人間科学科3年 小箱 駿太

私が大口台小学校でボランティアをさせていただいてから、あと少して1年が経とうとしています。最初のころは初めてということもあり、とても緊張している状態での活動でしたが、時間が経ち少し余裕が生まれたことで、現在は先生が児童に対してどのような対応をしているのか、あるいは児童の状況によってどのように指導を変えているのかといったことを観ることができています。

この1年のあいだ、学校内では1年生の教室に入ることが多かったのですが、それだけではなく運動会や4・5年生の宿泊体験への同行、低学年の動物園見学などについて行かせていただくなど、様々な学年の行事などにも参加することができました。そこでは普通の授業ではなかなか見ることのできないような児童たちのいつもと違う表情、行動を良い面でも良くない面でも見るることができたように感じます。そのような頑張っている姿や協力している姿は、より一層教師を目指そうという気持ちを強くしてくれます。

このように、様々な経験をしてきたなかで学んだことはたくさんありますが、特に大事だと思ったことは、児童との距離感です。児童からすると先生方よりも年齢が近く、近づきやすいのではないかと思います。しかし、そうして近づきすぎると授業中にも関わらず話しかけてきたり、私に気を向けてしまいなかなか授業に集中できないといったことが最初のころは見受けられました。先生としてではなくATとして入っていますが、児童からは手伝いのお兄さんというのではなく、一人の先生として見てくれるようにメリハリをつけて行動し、子供たちの助けになれば、と思い活動してきました。そうすることで、最近ではわからないことがあれば「先生」と呼んでくれたりすることで、以前よりも自分が成長できたのではないかと感じるすることができます。たくさんの児童と話し、接するといった関わりを持つことで距離感を縮めることは非常に大事だと思いますが、それが行きすぎないように、距離感を大事にこれからも活動していきたいと思っています。

最後に、この小学校でのボランティア活動のなかで活動の

目標を「褒める」ということについて設定しました。しかし、ただ褒めているだけではこの人は何でも褒めるのだと思われてしまいます。時にしっかりと指導することで、褒めた時に嬉しいと感じる瞬間が生まれるのではないかと思います。そうした使い分けを先生はどのようにしているのか盗みながら、この先活動していきたいです。児童の良いところ、良くないところしっかりと目を向けて指導することができるようになっていきたいと思えます。1年間、学校現場に実際に足を運べたというのは私にとって非常に大きい経験だったように思えます。このようなあまり経験できないような機会を設けてくださる方々や環境に感謝しつつ、これからも今まで以上に多くのことを学んでいきたいです。



大切な2年間

人間科4年 内田 朱音

後期は、ボランティア先の神橋小学校で教育実習があり、ATとして活動できたのは少なかったです。けれど、教育実習で子供たちと濃い時間を過ごし、学んだことをボランティアで生かすことで、短い時間の中でも有意義に過ごすことができました。後期の活動を通して、学習したことが2つあります。1つ目は、教師間でのコミュニケーションです。2つ目は、子供たちの家庭環境についてです。

最初に、教師間のコミュニケーションについて述べます。教師間での子供たちの情報共有は、非常に重要です。その日に起きた子供同士の喧嘩や怪我等は、些細なことも教師間で共有しておかなければ、更に大きな事態を招くことにつながるからです。私は、ATとして、中休みに子供たちと外で遊んでいました。そのとき走っていた子供が転び、膝を擦りむいてしまいました。すぐに私は、今やるべきことを考え、膝から出血していたために、膝を水道で洗うように子供に言い、その後怪我をした子供と一緒に保健室に行きました。怪我をした現場を見ていたので事情を養護教諭の先生に伝えました。「ありがとうございます。担当級の先生にも伝えとくね。」と養護教諭の先生がおっしゃっていたので、しっかりと伝えることができ良かったと一安心でした。どんな小さなことでも、情報共有し合い、状況によって保護者にも報告することで、子供だけでなく保護者にとっても、安心した環境をつくるのではないかと思います。

次に、子供たちの家庭環境について述べます。子供たちは、見た目や性格、考え方も様々で個性があります。家庭環境も多様であり、悩みを抱えた子供たちが多くいることを知りました。ボランティア先には、家庭環境が原因で学校カウンセラーに通う児童がいます。元気がなく登校してきたり、学級でも落ち着きのない様子が見られたり、精神面のサポートが必要な状態です。その児童に対して私ができることは、その子の今日の様子や気持ちを配慮しつつ、明るく挨拶し、笑顔で元気にかわることで、何よりも、子供たちが学校に楽しく登校してもらえるように、まずは子供たちとの「かわり」を大切に行動していくべきだと考えました。子供たちのために私ができることを全力で実行していこうと思います。

最後に、約2年間続けてきた学校ボランティアが後期で終わります。ATとして、子供たちの学習をサポートしたり、一緒に外で遊んだり、給食を食べたり、数えきれない程の貴重な経験をすることができました。また、教育現場で、教師の行動を実際に目で見て、教師としての心得を学ぶことができました。2年間、未熟な私を神橋小学校でATとして受け入れてくださったこと、他校でもボランティアの経験ができたこと、非常に嬉しく思います。心から、ありがとうございます。この活動で体得したことは、自分の将来の土台になると思っています。人生でどんな困難があったとしても学校ボランティアで経験したことを思い出し、常に「夢」に向かってこれからも努めていきます。

気付きに気付く力

英語英文科2年 末廣 帆乃佳

私は今年の4月から神橋小学校に外国語活動のサポーターとして週1回伺っています。

11月には神奈川区一斉授業研究会に参加させていただくなど、充実した活動をさせていただいています。

この授業研究会では他校の先生方や講師の方が授業を見に来てくださいました。私はその時、特別支援学級である4・5組の外国語活動の授業のサポーターを担当させていただきました。授業中は初めのあいさつや、英単語確認の進行、英語を使ったコミュニケーション活動の相手役などの役割を任せられました。4・5組は、私がサポーターとして授業に入るようになってから、一番多く担当している学級です。また、児童の人数が全体で10人のため、ほかの学級に比べて一人一人のことを細かく見ることができ、この子はこうして褒めると喜ぶし、この反応は良いのか・悪いのかの違いなども回数を重ねるごとにわかってきたので、ある程度は児童たちを理解できていると思っていました。

しかし、授業研究会でほかの学校の先生方や講師の先生にみていただき、自分では全く気づけていなかったことについてご指摘をいただきました。それは英単語確認の際に私が見せたリングの書かれたカードを見て、ある児童がBeautiful colorとさきさき、自分の気付きを伝えようとしていることに気付かず授業を進めていたということでした。

これ以外にも同じ児童が何回か気付きを声に出していたそうです。私は授業を進行することだけに気を取られて、指摘されても覚えていないくらい、そのことに気付くことができていませんでした。ただ、単語確認のあとの児童の様子は立ち歩いたり、手遊びをしたりと、落ち着きがなかったことを覚えています。もしかすると、児童が気づきを声に出しているときに前に立っていた私が気付くことができ、一言でもいいので何か返せていたら、その児童は授業に積極的になれていたかもしれません。また、私は今までにも同じようなことをしていたのかもしれませんが。この指摘を受けて、自分の視野の狭さや気付くことのできなかつた力のなさを痛感しました。

この出来事をきっかけに、これから先のボランティア活動では、「児童の気付きに気付く力」を伸ばしていきたいと思いました。これは、やろうと思っていきなりできることではないとは思いますが、そこで、継続的にしっかり意識して成長していきたいと考えています。このように大学の授業だけでは学べない気付きを与えてくれる活動ができていることを幸せに思います。

英語と調べ学習

英語英文学科2年 山下 晴菜

今年の4月から、毎週金曜の午前中に神橋小学校で外国語活動のATとして活動しています。この活動にもだんだん慣れてきて、先生の動きや児童の反応を見る余裕がやっと出てきました。最近では、高学年の授業に入ることが多くなりました。そこで気が付いたのは、高学年になるほど英語で表現したいという積極性を見せる生徒が多くなることです。5・6年生の授業では英語で日本の良いところをALTの先生に紹介しようという活動があります。例えば“In Yokohama, you can enjoy nig ht view”といった表現を使います。下線部には自分で紹介したいものを調べて入れるのですが、当初はここは日本語でも良いということにしています。しかし実際には「これは英語では何ていうの？」と聞きにくる児童は多く、地方の名産品などには知らないものもあったので自分の知識だけで

は答えられないのが悔しいと感じていました。先日授業研究会があり、その時に担任の先生からは分からない単語があったら辞書も使って大丈夫と聞いたので、辞書も活用しつつ児童一人一人に教えて回るようにしました。すると児童たちは次々に単語を聞いてきて、結局ほとんどの児童が下線部も英語に直して練習していました。そのとき、児童はもっと英語で自分の考えを表現したいのだと感じました。さらに今までは答えられないことも多く諦めていたのかもしれないと気づきました。担任の先生からも児童が興味を持った時にすぐに教えた方が覚えてくれやすいと聞きました。中には「Sinkansen(新幹線)」など英語では表せない、または外国人にはなじみがないので無理に英語にしても伝わらないようなものもありました。そんな時には「これは日本特有のものだからそのまま言った方がいいよ。」と教えました。すると児童は「そんなこともあるんだ！」と驚いていました。質問に答えることで児童の新たな発見を促すことができると知りました。小学校高学年は中学校目前なので一層英語に慣れてほしい学年です。そのため楽しいだけでなく、児童が自分で考えて人に伝える練習をもっと手伝えるようなサポートをしていきたいです。

また、他教科と絡めた学習も高学年の児童はとて積極的に行っています。この授業では「地方の名産品を調べる」という社会的な要素を含んだ活動をしました。初めにどんなものを紹介したいか聞いたときには、みんな地方の名産品をほとんど知りませんでした。そのため、「沖縄だとサーターアンダギーとか美味しいよね。」など一人ずつ対応していました。しかしその方法では、児童はそれがどんなものなのかピンとこないため活動に消極的でした。そんな時、担任の先生が地方の名産品一覧を見つけてきて下さいました。そのおかげでたくさんある名産品の中から紹介したいものを選ぶという自由度が増え、児童は積極性を見せるようになりました。中には「日本中の名産品を地図に書きこみたい！」

という子もいました。さらに、数時間にわたってこの活動を行ったので家で調べてくる子もいました。英語の授業でも、このように他教科を横断した授業のほうが英語の実用性が感じられるため有意義で楽しい授業になることに気が付きました。特に高学年の児童は、より難易度の高いことに挑戦したいという意欲が高いと先生方に伺ったので幅広い知識を生かし、深めるような授業作りをしなければいけないのだと思いました。

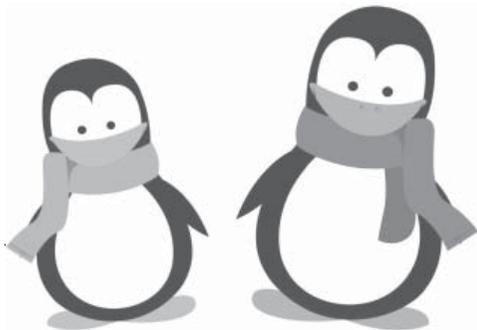
児童の成長を促す指導

法律学科3年 神田 祥佳

私が神大寺小学校のATとして、週に1回小学校教育の現場に携わらせていただいてから半年が経ちました。最初は慣れないことも多く不安があったものの、今では学校にも慣れ、担当している個別支援学級の児童とも仲良くなり、次のステップへと進んでいます。それは、先生方の指導方法を見て学ぶことです。

あるとき私は、一人の児童のプリントで分からない問題を個別的に教える機会がありました。そのとき、なるべく分かりやすいように児童に教えていたつもりでしたが、「もうめんどくさい。うるさい。」と言われてしまいました。私はこの言葉を聞いたとき、悲しい気持ちと自分の不甲斐なさでいっぱいになり、ごめんねと謝り自分の能力の低さを改めて感じ落胆しました。そして、担任の先生にあとでこのことについて相談すると、「あの子は私に対してもそうだから、そう言われたときは怒っていいよ。」とアドバイスをして下さいました。私は自分の力不足のことで頭がいっぱいで、児童のその発言自体を注意するなんて考えもしませんでした。このことから、教師は常に児童のことを考え注意するということを学びました。これからは児童にとって分かりやすい教え方を目指すとともに、状況に応じて指導するなど行動していこうと思います。

また、先生方の指導方法が素晴らしいからこそ、私は児童の大きな成長をこの目で見ることができました。それは、ある児童の衝立を外せるようになったことです。この児童は典型的なADHDの症状で、常に周りの音や行動に反応してしまい自分のことに集中できなくなってしまうため、児童の席の横には他の児童の様子が見えないうい



つも衝立を置いていたのです。しかし、その衝立がようやく外れました。先生にお聞きすると、学校にも慣れてきて衝立を外したことを教えて下さいました。様子を見てみると、まだ周囲の音に反応してしまうこともあります。以前よりも衝立なしで自分のことに集中できるようになったと感じます。

このように、児童の成長を実際に感じることでできてとても嬉しいです。そしてこの成長は先生方の指導と児童の努力があってこそのもです。私も児童の成長につながる指導ができるようになりたいと強く思います。

「先生」と呼ばれること

経済学科4年 萩原 慎

私は大学1年次から白幡小の土曜塾にお世話になり、毎週のATだけではなく、学校行事等にも参加させてもらい、4年間非常に多くのことを学ばせていただいた。特に、4年生の後期からは、ATとしての立場も大きく変化した。今までは、子どものサポートという意識で行っていたが、春から教員として働くことが決まり、ひとりの「先生」として参加させてもらっている。先生に授業の意図を伝えてもらいながら、子どもに的確な声掛けを行ったり、書類の印刷や郵送などの事務作業、保護者の方と放課後の学校掃除を行ったりするなど、かなり実践的な経験をさせていただいた。また、保護者の方と接する機会が多かったことから、子どもの後ろにはその子の成長を願う保護者がいて、その方たちとの連携や信頼関係の重要性に気づかせてもらった。この経験は、春から働く上での準備・心構えをすることができ、「先生」として働くことの自覚を養うことができた。

私が小さな頃から抱いていた「先生」のイメージとは、「何でもできる、何でも知っている」というもので、今もその思いは変わることはない。しかし、私はその理想とする「先生」のイメージとかなりかけ離れている。社会科の教員として十分な知識や経験もなく、今まで見てきた先生方のように学級経営を行う自信もない。さらに、子どもの成長に大きな影響を与えてしまう職業であることから、「私になってもよいのか？」という不安も大きい。

私がATの活動の4年間を通して気づくことがで

きたのは、出会った先生一人一人に良さや素晴らしさ、尊敬できる点があるということと同時に、どの先生方も苦手なことがあったり、指導において不安を抱きながら働いていたりするということだ。また、私のように新任として働く際には、不安もたくさんあり、実際に働いてからも自身の未熟さに気づかされたことも多くあったということも話していただいた。しかし、そのような話の中で共通していたことは、その日その日に今自分が子どもにできることを全力で行っていたということだ。

私にはまだまだ「先生」と子どもから呼ばれるほどの人間性や力量はない。それでも、子どものことを一生懸命に考え、接することはできる。失敗や後悔をすることも多くあることだろう。しかし、そうした時こそ自分をしっかり見つめ直し、常に子どもにとってベストな言動を心掛けていきたいと同時に、無理な背伸びはせずに私らしい先生像を生徒と共に創り上げていきたい。

「AT」から「先生」へ

英語英文学科4年 阿部 良美

白幡小学校でATとしてボランティア活動を続けて3回目の秋を迎えました。この秋は、今までATとしてボランティア活動を行っていたクラスで、2週間の教育実習もさせていただきました。直前に中学校で教育実習があり、およそ1ヶ月ぶりに子どもたちと会ったのですが、みんな今までと変わらない姿で私を迎えてくれて、2週間の実習が始まりました。

ATとしての活動期間が長いことから、子どもたちは私に対して「担任の先生のサポート役」という強いイメージをもっているようでした。そのこともあり、担任の先生が「次の授業からは阿部先生がやってくれます！」と声をかけてくださったあと、ある子どもから「先生って、授業できるんですかー？」と言われてしまいました。私も授業を行う前まではとても不安に感じていたのですが、実際に授業を行うことでそれまで感じていた不安はなくなり、新たに気付いたことがあります。それは今まで子どもたちと築いてきた関係性や、事前準備

の大切さです。

子どもたちとの関係性では、授業で今まで行ってこなかった活動を取り入れたのですが、その活動に対しても子どもたちの一生懸命に取り組む姿勢があり、今までのATとしての活動の中で授業を行うことに通じるよい関係性を築いていくことができたのではないかと感じています。また、授業以外の時間でも、子どもたちから何気ない声かけがありました。例えば、担任の先生がある児童を叱っている姿を見て、「先生も叱るときはあんなふうに叱った方がいいですよ！」と声をかけてくれたりしました。これらのことを通し、今までの「AT」としての立場ではなく、これから「先生」となる立場としての私をサポートしつつ、一緒に頑張ろうとしている関係性がうかがえました。

また事前準備の大切さでは、今回の実習ではただ授業を考え行うだけでなく、掲示物を作ったり、研究授業で行う授業と似た流れの授業を事前に一度行わせていただいたりしました。掲示物を作成する際は、たくさんの先生方に工夫点を教えていただいたこともあり、丁寧に子どもたちの学習の補助となる掲示物を作ることができたと感じています。そのこともあり、普段自信がなくなると極端に声が小さくなってしまふ私でも、自信を持って授業に臨むことができました。

今回の実習では、担任の先生が今まで築いてきた素晴らしい学級で授業をすることで、今私がつもっている力を最大限発揮した授業をすることができたと思っています。来年度からは、そのような学級を私自身で作りに上げていかなければなりません。その点が、今感じている私の大きな課題です。実習を通して感じたよい点は継続して発揮できるよう、また悪い点は改善できるよう努力し、4月に少しでも自信をもって教壇に立てるようにできたらいいと思います。



メリハリのある先生を目指して

経済学科3年 佐藤 康平

今年の4月に学校ボランティアへ参加し始めてから、早くも半年が経ちました。後期も引き続き、二谷小学校でアシスタントティーチャーとしてお世話になっています。前期は、まだ子ども達との接し方やアシスタントティーチャーという立場がよくわからなかったこともあり、戸惑いの連続でしたが、ようやく私自身が慣れてきたことと、子ども達も私に慣れてくれたのか距離が縮まったことで前期以上に充実した活動になっていると感じています。

私は、前期に「子ども達と柔軟に接する」という目標を立てました。そして、この半年の間に先生方の接し方や話し方を参考にさせていただいたり、子ども達との会話を重ねたりしたことで、子ども達との自然な話し方、接し方ができるようになってきました。しかし、その一方で「注意する力」、「注意の仕方」に関して力不足を感じるようになりました。

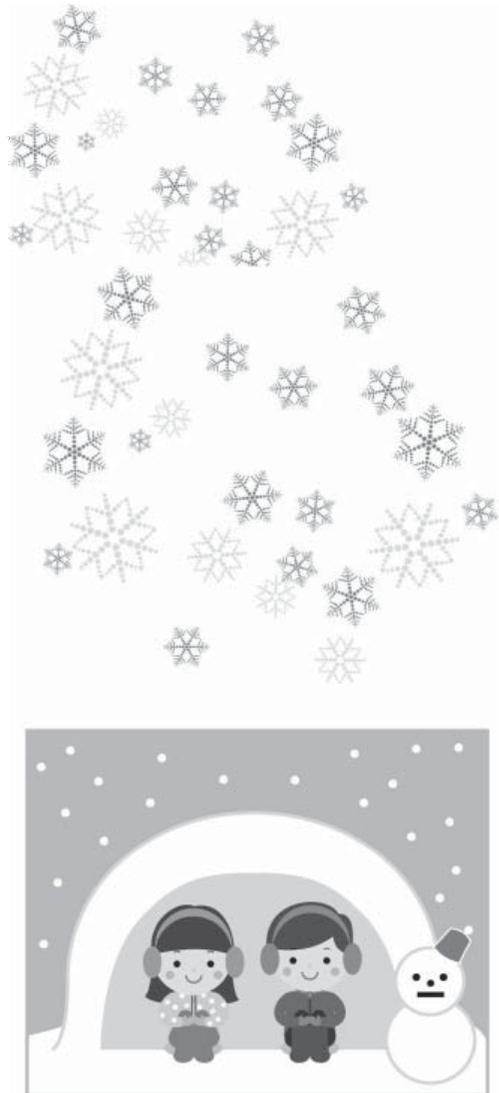
この「注意する」という指導に直面したのは、アシスタントティーチャーとして体育や野外での活動、休み時間の活動などに参加した時でした。子どもたちの運動や、活動は彼らにとって貴重な体験であり、挑戦であり、学びの場でもあります。しかし、それに伴うのが怪我や、友人とのトラブルなど



であり、それを未然に防ぐ注意をしなければなりません。先生方もこうした危険を未然に防ぐ指導は徹底しており、繰り返し注意したり、普段とは違って厳しく注意したりしていました。しかし、私はまだそうした注意をタイミングよく、且つ子どもにしっかり伝わるように行うことができず、結局、担任の先生がその場面での注意と指導を行うという場面ばかりになってしまいました。

「注意」や「叱る」という指導は子ども達にとって重要な指導であると同時に、子ども達の安全を守るための指導です。子どもたちとの距離が縮まってきた今だからこそ、ただ優しいだけ、話しやすいだけのアシスタントティーチャーになるのではなく、子どもたちの成長と安全のためにも「注意する」というメリハリを持った活動を後期は行いたいと思っています。そのためにも、今後の活動ではより一層先生方から様々な技術や話術、そして行動を学び取り、それを日々の活動の中でフィードバックしていくことを心がけていきたいと思っています。そして同時に、前期の経験を踏まえた上で更に子どもたちとの距離を縮め、より一層子ども達の視点に立った教師の在り方を学んでいきたいと思っています。

学ぶことはたくさんありますが、子どもたちとのふれあひも今まで以上に考えつつ、教師としての技術や立ち居振舞を学び取り、より良いボランティア活動、そしてより良い教師としての姿を目指すために努力していきたいと思っています。



私ができること

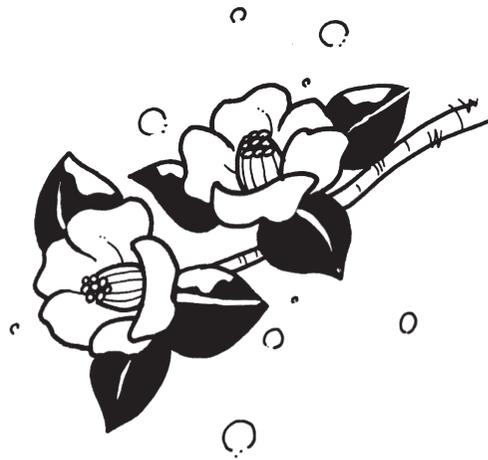
人間科学科4年 橋本 栞

これまで三年間、児童と一緒に授業を受けたり遊んだりする中で、児童の動きや発言、先生方の指導を見てきました。10月の活動中に、南神大寺小にいられるのもあと半年なのだと考えていたときに、「児童に何かできることはないか」という疑問が自分の中で出てきました。個別支援級では、休み時間は外に出て遊んで過ごす児童、パズルや絵を描いたりして過ごす児童など様々です。中には車いすで生活している児童もいます。興味や体力に差がある児童たちみんなに運動をしてほしいと考えていたときに、教室の隅に空気が抜けたバランスボールを見つけました。椅子の代わりに使えないか、と思い担任の先生にお願いしたところ、快く承諾していただくことができました。バランスボールに空気を入れてみると、これを見ていた児童が乗りたい、遊びたい、といった雰囲気を持ちながら近寄ってきました。このクラスの児童はバランスボールに興味があるのだとわかり、私はバランスボールを、運動不足を解消するための道具ではなく、からだを動かすって楽しい!と感じてもらうための道具にしようと思いました。元々体を動かすことが好きな児童は、私が何も言わなくてもボールに座ってはずんだり、バランスをとったりしていました。あまり運動をしない児童や車いすで生活している児童には、手を取り補助しながらボールの上でバランスをとるように促したり、床でボールを転がす遊びを提案したりしました。

クラスの児童の中の一人は、算数や国語のプリントになかなか手を付けずにぼーっとしていることが多かったのですが、バランスボールがあることによって、プリントに早く取り組むようになりました。

クラスの七人全員が、バランスボールを楽しく使っているか、と言われればそうではないのかもしれませんが、一人でも楽しいと感じてくれたことは、とても嬉しいです。このからだを動かすことが楽しいと感じてもらえて嬉しい、という感情は私が教師を目指した理由だったのだとやっと思出すことができました。

私が南神大寺小を卒業するまでにもう少し日にちがあります。それまでに、一人でも多くの児童にからだを動かすのは楽しい、スポーツって面白い、と感じてもらえるような活動をしたいです。



発行日:2016年2月27日

発行場所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL:045-481-5661(内線4352)

FAX:045-413-4154

E-mail:jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp